Interview

「針・糸・布から無限に広がる刺繍（ししゅう）の奥深い世界」

フリー刺繍画家・昭和女子大学名誉教授 天野寛子さん

記憶に留めてほしい出来事や風化させてはいけない言葉を、
フリー刺繍で表現する天野寛子さん。全国で個展などを開催、
東日本大震災でさらわれた高田松原を刺繍で作ろうと、プロジェクトを立ち上げました。
刺繍を通じてたくさんの人に思いをつなげる活動についてうかがいました。

インタビュー・文／幡本貴子

Vol.13
おとなre り

「おとな・り（re）」は公募で選ばれた区民ボランティアスタッフのみなさんが企画・取材・執筆を担当しています

Contents［目次］

03 インタビュー
天野寛子さん

06 特集 せたがやを歩こう
江戸時代の農業用水路を訪ねて
六郷用水（次大夫堀）散歩

08 せたがや交流情報局
地域の人々の交流拠点に!
暮らしに役立つ公共施設が続々誕生

10 元気づくり講座
健康度測定で
正しい体力づくりを

12 ボランティアことはじめ
世田谷のアンテナ
おとな・り（re）区民ボランティアスタッフ

14 おとな・り（re） 調査隊が行く!
75年前の絵日記が語る
身近にあった戦争体験!

15 おとな・り（re） スタッフの喜怒“愛”楽

16 こちら! おとな・り（re）社会部
世田谷区立男女共同参画センターらぷらす

18 スポーツで“せたがや人”の輪を広げよう
目指せ! 生涯現役　蹴球で仲間づくりと健康増進を!

19（上） おとな・り（re）スタッフのココ、体験してみました

19（下） 「せたがや生涯現役ネットワーク」加盟団体を紹介

20 地産地消でレッツクッキング
せたがやの野菜をもっともっと味わおう!

21 せたがやのイベントピックアップ

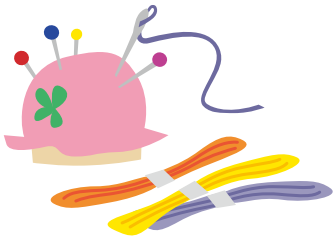
22 100年先も残したい世田谷の風景

手仕事は時間がかかる〝早くできない〟ことを楽しむ

「物のない時代に育ちました。長く着られるようにと与えられた服は大きいサイズの洋服。私はそれを、自分に合うように裾を上げたり、擦り切れたら繕ったり。工夫をして楽しむことを学んだ気がします」と話す天野寛子さん。小さい頃から針や糸、そして布に触れてきましたが、とりわけ心惹かれたのが刺繍でした。

「最初は、見よう見まねで人形のスカートに花などのモチーフを刺しました」

刺繍への関心は、大学を卒業して教員となっても変わりませんでした。「仕事と家事、研究、子育てのころは、自分の趣味の時間を持つことは難しかったのですが、隙間時間に、『ちひろの画集』を参考にして刺繍をしていました。針と糸で布に子どもの形が浮き出るのを見て、幼い息子も邪魔をしませんでした」。しかし物足りなさを感じていたある日、フリー刺繍画の桜井一恵さんの作品に出合います。「一目見て、私がやりたい刺繍はこれだって思いました。これまでに感じたことのない自由な発想にあふれていました」。



フリー刺繍画とは、フランス刺繍の技法をベースにして、既成の図案を使わずに、布と糸を使って絵を描くように刺し、布を重ねて質感を出したり、と感性のおもむくままに作るもの。桜井先生の教室のフリー刺繍の課程終了後は、自分のテーマで制作し楽しんでいるという天野さん。作品作りのヒントは、自然や美術館での絵画鑑賞、テレビ、新聞、本など身近なところから。「ザッとデッサンをして、布を配置して留め付け、刺繍に取り掛かります。刺しながら考えるタイプです。一針一針刺す作業はとても時間がかかりますが、心が落ち着くひとときです」。

無力さと不条理を布に刺して祈りにつなげる

天野寛子さん

Profile

1940年生まれ。三重県出身。昭和女子大学生活学科卒業。以後、助手・講師・助教授・大学院教授を経て2009年退職。現在、フリー刺繍画家、昭和女子大学名誉教授。刺繍は趣味として長く制作。1986年から桜井一恵氏に師事。東日本大震災後「『みんなのたからもの』ししゅう高田松原プロジェクト」を立ち上げ現在に至る。

上／新聞広告として掲載されていた、徳島県にあるブルワリーから着想を得て作られた「5月の窓」。天野さんの最新作

下／「東日本大震災（8）－ベルトコンベア・桜ライン・風の電話－」は、岩手県陸前高田市の高田松原跡地に立つ「奇跡の一本松」を中心に、被災者の短歌をあしらった作品

天野さんに転機が訪れたのは、2011年に起こった東日本大震災。「何もできない自分に無力さを感じ、落ち着きませんでした。震災の3週間後から、震災関連の新聞の切り抜きを使い、刺繍で人の悲しみを留めておくことにしました」。被災地の光景を布に刺すことで自分の気持ちを鎮めていった、と天野さんは話します。

天野さんの作品のなかで注目されているのが、被災者が詠んだ短歌や俳句を糸で刺したもの。「新聞の歌壇には、被災者の心が詠まれていました。それを刺繍画にすることで、作品を見た人がいっそう被災地や被災者へ思いを重ねているのではないでしょうか」。

2013年に岩手県陸前高田市を訪れた時、被災者支援団体のメンバーだった中西朝子さんとともに「『みんなのたからもの』ししゅう高田松原プロジェクト」を立ち上げます。「プロジェクトのキッカケは、ある被災者が言った『陸前高田がこんなに美しい街だったと孫に伝えられるように刺繍してみたい』という言葉でした」。

プロジェクトではワークショップを行い、高田松原を刺繍する参加者の指導にあたりました。全国から集まった作品741枚をつなぎ合わせタペストリーにしたものを、天野さんの個展の時に同時展示したりしてきました。

「作品を見たみなさんが震災に関する記憶を留めてほしい、と願っています。また、作品を通じて多くの人々がつながり、被災地へ心を寄せてもらえればと思います」

最後に、「おとな・り（re）」読者へのメッセージをうかがいました。「今、自分が持っている能力で最大限に楽しむことです。私は、作品を作るとき自分の年齢を考えたりしません。年だからできるとかできないではなく、今やりたいことできることは何かと考えます。シンプルですが、それを大切にしています」。好きなことを続けられるのは、楽しいし幸せなことですね、と柔らかくほほ笑まれたのが印象的でした。

インタビューを終えて

天野さんの自宅兼アトリエは居心地がよく、刺繍作品に見守られているように感じました。心を込めて作る唯一無二の作品だから、独特な“気”が出ているのかと思いましたが、今考えると、優しい笑顔の天野さんが発する“気”だったのかもしれません。ステキな人柄と作品に触れて、幸せなひとときでした。（幡本）